

## 徐福東渡出航地と到達地について - 徐福伝説を探る -

神奈川徐福研究会会長 田島孝子  
神奈川徐福研究会会員 伊藤健二

1 徐福伝説とは？	-----	2
2 中国各地の徐福関連地	-----	3
① 浙江省慈溪市	-----	4
② 江蘇省連雲港市贛榆県	-----	4
3 日本での徐福伝説	-----	5
① 和歌山県新宮市	-----	5
② 三重県熊野市	-----	6
③ 佐賀市	-----	6
④ 福岡県八女市	-----	7
⑤ 京都府与謝郡伊根町	-----	7
⑥ 山梨県富士吉田市	-----	7
⑦ 東京都北区王子	-----	8
⑧ 秋田県男鹿	-----	8
⑨ 青森県小泊	-----	8
4 伝説と歴史	-----	9
① 徐福来日は歴史上の事実なのか？	----	9
② どうして徐福伝説が生まれたの？	--	9
③ 徐福の来日は、「あり得ない話」なのか？	--	10
④ 徐福の時代の日本は？	-----	10
⑤ うさん臭い徐福？	-----	10
5 終わりに 徐福研究の意味	-----	11



←徐福に下命する始皇帝  
(山東省琅琊台)  
写真提供:池上正治

## 1 徐福伝説とは？

司馬遷の『史記』(※1)の巻百十八「淮南衡山列伝」の記述によると、方士(※2)である徐福(※3)は秦の始皇帝(※4)に、「東方の三神山に長生不老(不老不死)の靈薬がある」と具申し、始皇帝の命を受け、3,000人の童男童女(若い男女)と百工(多くの技術者)を従え、五穀の種を持って、東方に船出し、平原広沢(広い平野と湿地)を得て、王となり戻らなかった。(※5)

この『史記』が徐福伝説の出発点だ。中国には徐福の故郷や出港地等の徐福ゆかりの地があり、日本には徐福が到達したところ、訪れたところなどの伝説がある。

この講座では、徐福伝説の基礎と、中国や日本の徐福伝説を一部紹介し、歴史面からの検証、最後に徐福研究の意味を考えてみます。

<p>※1 司馬遷と史記</p>	<p>司馬遷は代々歴史編纂の家柄にあり、前漢の武帝に使え、武帝の勘気を被り刑に服すなどしたが、歴史書『史記』を完成させた。史記は物語として描かれ、記述の一つ一つが事実ではないかもしれないが、司馬遷は政府の歴史編纂担当の役人であり、情報を調査できる立場にある。また史記の記述が徐福の時代から約100年後のことであり、徐福の存在は創作ではないと考えられる。</p>
<p>※2 方士(ほうし)とは</p>	<p>方士とは、その時代の肩書きであるが、神仙、医薬、保健、摂生の技を持つとされている。神仙というのは、ある種の神秘的な思想である。その源流は、中国でいう五岳の一つ泰山(山東省)を神の山として崇めることにあり、長寿を願い、不老を志向する。神の山はいつしか現実にある泰山から「海中の三つの山」となる。この神仙思想は、中国の民間に今も根強く残る道教の基盤でもあり、重要な要素である。(池上正治著『徐福』より。一部要約)</p>
<p>※3 徐福とは</p>	<p>徐福は戦国時代に、現在の山東省にあたる斉国に生まれたが、斉国は秦の始皇帝により滅ぼされた。そして徐福は方士として始皇帝に近づいた。1982年、江蘇省連雲港市内で、徐福が住んでいたと伝わる徐阜村(徐福村)が存在することがわかった。</p>
<p>※4 始皇帝とは</p>	<p>秦の始皇帝は、紀元前221年、周辺の国々を滅ぼし、中国史上初めて統一国家を築いた。始皇帝は、万里の長城、大運河の建設、度量法、言語の統一などの業績が知られるが、焚書、儒学者を生き埋めにするなど、暴君でもあった。 一方始皇帝は神仙思想に染まっており、徐福が上奏した、不老不死の靈薬を東の海に取りに行く事業を了解した。</p>
<p>※5 徐福東渡の意図は</p>	<p>徐福は、不老不死の靈薬を取りに行ったのではなく、本当は始皇帝の圧政から逃れるための亡命であったとも解釈されている。多くの童男童女を連れて行ったのは、表向きは仙人は純真な人間としか会うことをしない、というのだが、新天地の開拓が目的であったのではないかと考えられ、五穀の種を持って行ったのも同様の目的と考えられる。</p>

## 2 中国各地の徐福関連地

中国では、徐福の時代はすでに神話の時代ではなく歴史の時代であり、歴史としての徐福研究も進められている。最近の研究で、徐福の生まれ故郷の地が明らかとなった。

一方徐福がどこから出航したかについては、司馬遷の『史記』にも記載されていないが、中国の各地に、「徐福の出港地」の伝承が残されている。これらの徐福ゆかりの各地では、徐福像が建立されたり、徐福に関するイベントが開催されたりしている。このうち、慈溪市と連雲港市の様子を紹介する。



## ① 中国浙江省慈溪市

寧波(ニンポー)は、遣唐使の上陸地点であり、また道元が禅を学んだ場所として日本人になじみが深い。その近くの慈溪市に「達蓬山」があり、徐福出港地として多くの伝説が残されている。



2009年中国浙江省寧波市慈溪市での国際フォーラム

「達蓬山」とは、「海の彼方の仙人の地である蓬莱に達する山」の意味だ。最近達蓬山を公園として整備し、ここで 2009 年に国際徐福フォーラムが開催された。日本、韓国を含む研究者が発表を行い、また新たに作った徐福像の除幕式、徐福時代の儀式の再現劇が行われた。



徐福公園の徐福像除幕式



徐福時代の儀式の再現

## ② 中国江蘇省連雲港市贛榆県

連雲港市贛榆(カンユ)県の北部に、かつて徐福村の地名があり、1982年、歴史学者の調査により、ここが徐福の故郷であることが判明した。戦前は、ここに「徐福廟」があったが、日本軍によって破壊されたようだ。しかし 1998 年立派な廟が再建された。



徐福廟での高校生による劇

贛榆県では、定期的に徐福祭が開催され、2010年10月に第8回徐福祭が開催された。

昼は徐福廟(道教の寺院)で大勢の地元高校生による徐福東渡の寸劇が行われ、夜は大勢の市民が参加し、芸能花火大会がおこなわれ、歌、コント、京劇が催され、合間には花火が打ち上げられた。歌も若い人向けのものが多く、大型スクリーンも設置され、演技者と若い観客たちで盛り上がった。



芸能花火大会

### 3 日本での徐福伝説

『史記』によると、徐福は平原広沢（広い平野と湿地）を得て王となり、二度と帰ってこなかった。この「平原広沢」がどこであるかは書かれていないが、日本の各地には徐福が来たという伝説が残っている。また韓国済州島には、徐福が通過したという伝説もある。

右の地図は徐福の伝承があるとされている場所であるが、伝承と言っても内容は様々で、民話となっているところ、神として神社に祀られているところ、徐福の墓があるところ、徐福の絵巻などが残されているところなどである。

この中のいくつかの伝承地を紹介する。



徐福渡来伝承地 (HP徐福渡来伝承の地紹介サイトより)

#### ① 和歌山県新宮市

新宮市は紀伊半島南部の「熊野地方」の中核都市である。伝説では、徐福はこの地に永住し、土地の人たちと田畑を開墾し、農業技術、漁法、捕鯨、製紙など多くの技術を伝えたと言われている。(HP 徐福伝説より)

現在、新宮駅の近くにある徐福公園内には、江戸時代初期に紀州藩によって建立されたという徐福の墓がある。また平成になってから中国風の門、徐福像等を建設した。毎年お盆に、この徐福の墓の前で供養式典が開催されるが、2013年の式典では、初めに爆竹をならしたり、チャイナ服を着た子供達が茶の接待をしたりして、中国風の演出があった。



徐福公園入り口



徐福の墓

このほか新宮市内の、蓬莱山南麓の阿須賀神社には徐福を祀った「徐福の宮」、徐福の重臣を祀った「重臣塚」等がある。お盆の夜は徐福の慰霊のための花火



徐福の墓前で僧侶による供養

大会が開催され、市民に根付いた徐福伝説が感じられる。

## ② 三重県熊野市

三重県熊野市内の波田須（はだす）地区には、徐福の宮がある。伝説では、徐福の船がここに流れ着き、やがて窯を設け、焼物を人に教え、また、土木、農耕、捕鯨、医薬などの中国文明を里人に教えた。



徐福の墓

徐福の宮では江戸時代から徐福を祀っていたが、明治政府の神社合祀により近くにある「波田須神社」に統合され、徐福の宮は廃社となった。しかし

氏子たちは明治 40 年、ここに墓を作り、名目上は墓を守るということで密かに徐福の宮を祀りつづけ、戦後に復社を果たしたということだ。

明治時代の神社統合により多くの神社が破壊され、鎮守の森が伐採されたが、ここでは結果として巨木が茂る鎮守の森を守り抜いた。



徐福の宮と守り抜いた鎮守の森

## ③ 佐賀市

佐賀市内の金立神社には徐福が神として祀られ、市内各地に徐福の上陸地、お手洗いの井戸、お手植えの神木などの伝説が残されている。また、伝説の中で、徐福を慕った「お辰さん」が金立神社に祀られている。

(写真は全てホームページ「伝説の扉・徐福伝説」による。)



金立山と徐福像



お堂の中の徐福象



徐福のお堂

#### ④ 福岡県八女市

ここの伝説では、徐福の乗った船は嵐にあって沈没し、徐福は息絶え海岸に打ち上げられた。村人達は、火をたいて一所懸命に介抱し、徐福は息を吹き返した。徐福は全てをお話しし、最後に「私が求めていたのは、不老不死の薬ではなく、あなた方の暖かい情けでした。私は、このなにもものにもかえられない宝物を手に入れることができ、思い残すことはありません」と言って安らかに息を引き取った。村人たちは、徐福のために墓をたて、そのまわりに火をたいて徐福の魂をなぐさめた。

墓は八女市の「童男山古墳」とされ、現在も毎年1月20日に古墳の周辺でたき火をする「童男山ふすべ」が行われている。



「童男山ふすべ」の行事

#### ⑤ 京都府与謝郡伊根町

伝説では、徐福が伊根町新井に漂着してから、里人をよく導いたので邑長（むらおさ）となり、死後、産土神（うぶすながみ＝生まれた土地の守護神）となり、現在も新井崎（にいざき）神社に祀られている。伝説の内容は江戸時代安政年間の記録にあり、最近それを石碑にして建



立した。なお、この地区の地形は海岸段丘が発達し、独特の景観を呈しており、また近くには浦島太郎伝説地もあり、仙人が住む神仙思想にふさわしい地形となっている。

新井岬の先端に新井崎神社がある

#### ⑥ 山梨県富士吉田市

富士吉田には、徐福雨乞い地蔵があり、平成11年に徐福祠と徐福像が建てられた。また、市内の福源寺には、「鶴塚」と呼ばれる石碑が残されているが、そこに書かれているのは、徐福が死んで3羽の鶴に化身し、空に舞い上がり、その鶴が千何百年か経ったころ1羽が死んで福源寺に落ち、それを葬ったのが鶴塚だと言う。このほか、徐福の祠、徐福の墓などがあり、さらには徐福が書いたと記されている『富士古文献』までであるが、これは近年に書かれた偽書とされている。



徐福公園(2013年2月、徐福祭開催)

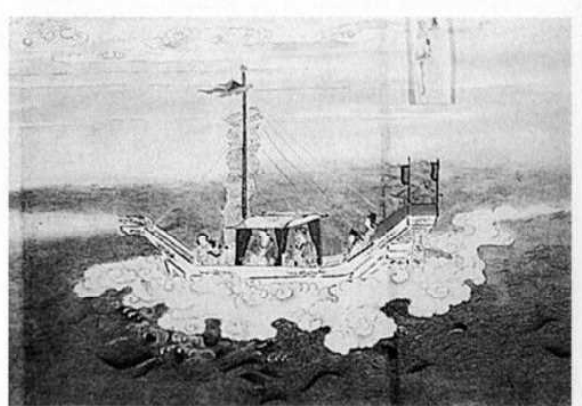
## ⑦ 東京都北区王子

東京都北区の王子神社に残された絵巻に、船に乗った徐福一行が描かれている。どのような経過でこの絵巻が王子神社にあるのかは分からないが、11世紀半ば、中世武士団豊島氏がこのあたりを支配し、土地を熊野山に寄進するなど、熊野三山との結びつきを深めた。

王子神社のそばに、桜の花見で有名な「飛鳥山」がある。東京都北区飛鳥山博物館発行の資料によると、ここに江戸時代初期まで「飛鳥明神社」があった。こ

これは和歌山県新宮市の阿須賀明神を分社したものだと言われており、飛鳥山で発掘された仏像も阿須賀明神系のものだった。新宮の「阿須賀明神」は、現在は「阿須賀神社」となったが、現在でも境内に徐福を祀る「徐福宮」がある。

北区には、廃社となったものも含めると、数カ所の熊野社、紀州神社があったといい、熊野地方との濃厚な結びつきが感じられる地域だ。



神社の絵巻に登場する徐福ら一行（東京都王子神社）  
(池上正治著『徐福』より転写)

## ⑧ 秋田県男鹿

江戸時代後期の紀行家、菅江真澄（すがえ ますみ）が記録したスケッチと文の中に、「徐福塚」が記されている。この「徐福塚」は現在は失われたが、平成17年、地元の有志により、自然石を用いて復元した。この場所は、廃寺となった「永禅院」の敷地内であり、ここはかつて巨大な修験者の寺院で、現在は赤神社の一角となっている。

元々の徐福塚は、道路の拡張工事により取り払われたのではないかとされている。



復元した徐福塚

## ⑨ 青森県小泊

青森県中泊町小泊の尾崎神社に秘仏の徐福象が保管されている。尾崎神社は、江戸時代には修験道の飛竜宮であり、背後の権現崎全体が修験道の聖地であった。熊野の修験道との関係があったが、明治の神仏分離令により現在の尾崎神社となった。

この秘仏の徐福像がいつどのような理由で持ち込まれたかは、今となってはわからない。しかし近年、地元では立派な徐福像が建立され、地元の振興に役立っている。



青森県小泊の徐福象



## 4 伝説と歴史

### ① 徐福来日は歴史上の事実なのか？

徐福が不老不死の霊薬を求めて東渡したのは、紀元前 210 年ごろとされている。これは卑弥呼の時代から 400 年以上前、古事記、日本書紀が書かれた時代から 900 年以上前であり、文字がない時代でもあり文献として残るには、時代が古すぎる。

日本に徐福が来たと記されている最初の文献は、960 年頃、中国で書かれた『義楚六帖』だと言われ、日本から来た僧侶に聞いた話として、蓬莱山、すなわち富士山に来たことが記されている。このころから日本に徐福伝説があったことがわかる資料であるが、徐福の時代から約 1200 年もたっており、歴史の資料とはなりえない。考古学的にも、この時代の金石文字（金属や石に刻まれた文字）などがあるわけではなく、徐福が本当に日本に来たかどうかは、歴史的には確認できていない。

### ② どうして徐福伝説が生まれたのか？

徐福伝説のある所はほとんどが修験道の寺院、聖地である。新宮を中心とする熊野地方は、修験道の本拠地であるし、このほかの主な徐福伝承地を見ても、佐賀市の金立神社、山梨県の富士山麓、秋田県の男鹿、青森県の小泊など、多くが修験道寺院と関わりのある場所だ。修験者は熊野を本拠地として全国を渡り歩いており、修験者が徐福伝説を全国に伝えた、というのが有力な説だ。

修験道は、山へ籠もって厳しい修行を行うことにより、悟りを得ることを目的とする日本古来の山岳信仰であり、修験道の実践者を修験者または山伏という。修験道は、仏教や神道を取り入れた神仏習合の信仰であり、日本の神と仏教の仏（如来・菩薩・明王）がともに祀られる。表現形態として、権現（神仏が仮の姿で現れた神）などの神格や王子（参詣途上で儀礼を行う場所）がある。また修験道は**道教（※）**からも大きな影響を受けており、徐福と修験道が関連づけられる。

#### ※：道教とは

中国、古代の民間信仰を基盤とし、不老長生・現世利益を主たる目的として自然発生的に生まれた宗教。のち、仏教への対抗上、神仙説など道家の思想、および仏教の教理儀礼が取り入れられた。5 世紀前半、北魏の寇謙之（こうけんし）が教祖を黄帝・老子とし、張道陵を開祖として道教教団を形成した例もあるが、多くは民間信仰として発展した。（goo 辞書より）

日本には道教の経典や道士の組織的な導入はなかったが、中国との交流の中で、道教的な考えが取り入れられ、神道の祭祀、陰陽道、庚申信仰などに影響が見られる。庶民の年中行事の中にも、正月の不老長寿の仙薬の屠蘇（とそ）、端午の節句の鍾馗（しょうき）様の人形を飾るなどが見られる。特に山岳信仰と仏教が習合した修験道は、山で修行することにより神通力を得るなどの考えなど、道教の影響を濃厚に受け継いでいる。

### ③ 徐福の時代の日本は？

弥生時代の始まりの年代は、近年までは、紀元前3世紀だと言われ、徐福の時代と一致することから、「徐福一行が縄文時代を終わらせ弥生時代が始まった」との見解も生まれた。しかし近年の年輪法（年輪は年により育ち方が異なり、発掘された遺跡の木材の年輪を見ることによって年代がわかる）など、考古学の発達により、弥生時代の始まりは紀元前5世紀ごろとされるようになった。さらに国立歴史博物館の炭素法による研究（炭素14が時間と共に減少するので、「おこげ」などの炭素を測定することにより年代がわかる）では弥生時代の始まりは紀元前10世紀ごろとされるが、異論もある。いずれにしても最近の考古学の研究成果による弥生時代の始まりと、徐福とは、時代が一致しない。

では徐福の時代の紀元前3世紀の日本はどのような時代だったのか。

文献で初めて日本が現れるのは、紀元前1世紀の『漢書』であり、そこには、漢字19文字で「夫れ楽浪の海中倭人あり。分かれて百余国をなす。歳時を以て来りて貢見すと云う」（倭は百余国に分かれ、漢の楽浪郡まで定期的に朝貢した。）徐福の時代はそれの約200年前であるが、考古学的調査からも、当時の日本は、地域的な統合が進展し、多くの「クニ」が形成されつつある時代だと考えられている。弥生文化は、大陸から弥生時代の初めに渡来しただけでなく、青銅器や鉄など弥生時代の途中で、大陸から入ってきており、徐福の時代にも大陸から人や文化が来たことは十分考えられる。しかし徐福という固有名詞はあらわれないので、徐福の来日は歴史とはなりえていない。

### ④ 徐福東渡を学術的に迫ろうとする動きもある

2013年3月3日、佐賀県徐福会主催により「徐福フォーラム in 佐賀-今解き明かされる徐福伝説」が開催された。パネリストは土井ヶ浜遺跡の博物館館長、佐賀大学農学部、元吉野ヶ里遺跡の発掘リーダー、愛知県立大学の民俗学博士などの学術研究者だ。人類学の立場からは、「縄文人と弥生人の人骨の形状は大きく異なるが、弥生人でも地域により特徴が異なる。中国大陸の人骨も研究し、山東省の前漢、周（東周=戦国時代）の人骨は、北部九州、山口の人骨と酷似している。」との説明があり、弥生人が中国大陸から来たであろう事の説明があった。農学の立場からは、遺跡に残された炭化米の研究から、当時の米が直接中国からもたらされたことの説明があった。また、民俗学の立場から、徐福伝説生成の過程が説明された。このフォーラムは、徐福が実際に来たかどうかは確認できないにしても、弥生時代に中国からの渡来人が歴史的な事実であることを明らかにした。

佐賀県徐福会では、2015年度も学術的なフォーラムを予定しており、期待したい。

### ⑤ 学術的でない徐福の研究も多くある

インターネットで「徐福」を検索すると、「失われた徐福のユダヤ人、物部氏の謎」、「安曇族と徐福の接点」、「物部氏は徐福一行の末裔」「徐福は神武天皇」などの多くのホームページにヒットする。これらに特徴的なのは、日本書紀のストーリーと結びつけ

ていることで、徐福を神武天皇やスサノオだとしたり、徐福一行を物部氏や秦氏だとしている。なぜこのような考えが生じたかについて、富士吉田の徐福研究者である羽田武栄氏が、富士山麓に残る「羽田氏（秦氏、波多氏）」伝説に関してみごとに分析しているので、長くなるが引用したい。

紀元三世紀頃、富士北嶺に渡来人が住み着いたことは歴史的な事実と説明した上で

「紀元前三世紀といえ、徐福らが東渡してすでに400年余りの歳月を経ている。にもかかわらず、これらの渡来人たちは徐福一行である何故いわれたのであろう。

これについては、大変興味ある文章が残されている。それは江戸時代中期に前述の川口御師団が徳川幕府巡察使青木文蔵（蘭学書・儒学書で甘藷先生の名で知られる）に差し出した『河口御師団由緒』である。

この中で、渡来人秦氏（波多氏）の末裔を自認する御師団は、彼らの先祖が河口の里に来た理由として、徐福がかって住んだ縁の地であるので移り住んだと述べている。つまり、この地の秦氏は徐福の子孫ではないが、同郷の徐福を慕っているというわけである。しかも、彼らの祖神を祀る波多志之神祠（この由緒では秦大明神となっている）が徐福を祀るとあれば、彼ら自身が偽称するまでもなく第三者が徐福の子孫と誤認するのは無理もないことであろう。

以上が筆者が考証した富士山北嶺の徐福伝承の背景である、」

## 5 終わりに 徐福研究の意味

徐福が歴史研究としての対象とはなり得ないことは今まで述べてきた。それでは日本各地の徐福研究者達は、どのような立場で徐福研究を行っているのだろうか？

和歌山県新宮市や、佐賀県佐賀市などでは、地域に根ざした伝説があり、市の協力の下に行事などをもり立てている。これらの地域では、行政も加わって、伝説の継承、街おこしなどのために、関連行事や講演会等を行っている。

外にも各地に「徐福会」が設立され、これらの「徐福会」では相互に交流を図っている。各地の徐福会は、「どの地域の徐福が正当か？」などという論争が生じるわけではなく、楽しく交流している。

また中国の徐福研究者との交流も活発で、定期的に日中の徐福研究者が集まり、フォーラムを行っている。日中間では徐福は日中友好のシンボルとして、活躍している。

神奈川徐福研究会は、神奈川県日中友好協会の中にあり、徐福講演会の講師に中国大使館の書記官を招くなど、徐福を通じて厳しい関係にある日中間の友好促進に役立てて行こうと考えている。



中国大使館書記官 王麟先生 2013.7.17

**参考文献**（この資料をまとめるに当たり、次の書籍を参考にいたしました）

- 『徐福』 池上正治著 原書房 2007年10月  
『徐福伝説考』 達志保著 一季出版 1991年3月  
『徐福論』 達志保著 新典社 2004年6月  
『真説 徐福伝説』 羽田武栄・広岡純 三五館 2000年2月

そのほかの徐福関連図書を紹介

- 『太古のロマン 徐福伝説』 佐賀市 監修 加茂禎一郎  
『弥生の日輪』 飯野孝宥 新人物往来社 1993年9月  
『真説 徐福伝説』 羽田武栄・広岡純 三五館 2000年2月  
『月花の旅人』 中上紀 毎日新聞社 2007年7月  
『吉野ヶ里と徐福』 内藤大典 西日本新聞社 2008年4月  
『南紀新宮・徐福伝説の殺人』 西村京太郎 2013年1月  
『徐福東渡の物語』 原作:中国慈溪市徐福研究会 翻訳編集:神奈川徐福研究会